
短編 | 真剣で私に恋しなさい！！

赤司楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編—真剣で私に恋しなさい！！

【Nコード】

N3232Z

【作者名】

赤司楓

【あらすじ】

文章力向上の為に書いたよく分からない作品。

(前書き)

ただの練習作品です。
連載する予定はありません。

普通の戦闘ではなかった。

銃や刀といった物を一切使用せずに、男と女は己の体一つで激しい戦闘を繰り広げていた。

それは、もはや人と人による戦闘ではない。

人という生物の許された領域を遙か超越した者達によって繰り広げられる戦闘は、まさに漫画やライトノベルで行われる戦闘そのものだった。

たった一発の『突き』でも暴風を強制的に引き起こし、そこに存在する全ての物を遙か彼方まで吹き飛ばす。『蹴り』を放てば地面に亀裂を刻み、大地を分裂させる。

そんな戦闘を行っている片方が女だという事を、誰が予想するだろうか。

――川神百代。

『武神』、川神鉄心の孫娘であり、『天賦の才』を持つ黒髪の美少女。

その実力はまさに一騎当千。

――穴戸大河。

『武聖』、穴戸巴の孫で『天賦の才』を持つ白髪赤目の少年。その実力は言うまでもなく、一騎当千。

『最強』と『最速』。

互いに対等の存在を欲した者同士。
似た者同士。

――何故、私たちは戦っているんだ……？

吹き荒れる煙に視界を奪われた百代が、一瞬だけ、だが確実にそう思考した。

大河の左膝には『故障という名の爆弾』がある。こんな豪快な戦闘を繰り広げていては、大河の『左膝』を潰すのを早めるだけだ。それだけは絶対に避けたい。

だからと言って、今の大河を止めるのは容易ではない。

吹き荒れる煙を吹き飛ばす蹴りを放つ大河の姿が見えた。

決して色付く事を許されない絶対的な白は己の血によって、赤く染め上げられていた。

口元に流れる血を舌で舐め取り咀嚼する。鉄の味が口一杯に広がっているのが分かる。その姿はまるで、獰猛な猛獣のように見えた。

百代は、最後の希望をかけて、大河に話し掛ける。

「……大河」

「あん？」

「もう、止めにしないか？」

「プツ……」

思わず、吹き出してしまった。

「ギャハハハハハハハハハハ！何言ってんだアオマエ？殴られ過ぎて頭イカれたかア？」

ニヤニヤとした笑みを浮かべる大河。

百代は瞼を閉じ、覚悟を決めた。

合図はなかった。

百代は再び瞼を開く。

同時に、百代は動いた。

聞く耳を持たない大河を止めるには、もう力づくしかない。そう。

力づくで。

――

クリスは崩壊した川神学園にいた。

満身創痍だった。もう立っているので限界だった。

それでもクリスは動いた。全身の筋肉が、骨が、動くのを拒むように体が震える。

分かっている。

自分では、大河に勝てない事は。

だが、それでもクリスは無理矢理体を動かし

、折れたレイピアを拾う。

こんな折れたレイピアで戦う事が出来ないのは、分かっている。

理解している。

だが、

――自分は、大河を止められなかった。

その後悔が、クリスの中で膨張している。

大河は強い。

『クリスでは到達する事のできない領域』に足を踏み入れている事も知っている。

だが、それがどうした。

こんなところで絶望している暇はない。

その時だった。

バチチチ、という音がクリスの耳に聞こえた。それと同時に、青白い雷がクリスを纏っていた。

分かる。

分かる。

こんな現象を起こせるのは、一つしかない。

『聖なる氣』

使用者に最も適した力を与える氣。

雷。

それを体に纏っている。

雷を末梢神経に直接流し込む事によって反射行動の圧倒的な強化。

その情報が、自然に頭に入ってきた。それがどういいう理屈で頭に入ってきたのか、クリスには分からない。

だが、分かる必要もない。

クリスは、折れたレイピアで軽く突いた。

轟ッ！！という轟音が聞こえた。

あまりの威力と速度に、クリスは目を限界まで見開いて驚いた。

――いける。

確信する。

――この力があれば、大河を止めれる！！

迷いはない。

クリスは、圧倒的な速度で、川神学園を後にした。

――

血を咀嚼している大河に、百代の渾身の蹴りが直撃した……かに見えた。だが、吹き飛ばされたのは、百代の方だった。

圧倒的な精度とスピードで放たれる大河の攻撃。それをかわす事が出来ずに、直撃してしまった。勢い良く後方にふっ飛ぶ百代。その頭上から、さらに追い打ちをかける大河。

ドンツ！！という轟音が聞こえた。

大河の蹴りをモロに受け、地面に雲の巣のような亀裂が走る。その威力は、地面にできた傷跡を見れば、どれ程のものが予想ができる。

「何だよ川神イイイ！！そんなモンかよ！！オマエの力は！！」

狂気に身を浸した大河の実力は、百代より上だった。

力を欲すれば、最後にあるのは己自身の崩壊。

ただそれだけ。

煙によって大河の姿は隠される。

百代の頬に、一滴の涙がこぼれた。

何故だ、と百代は思う。

何故大河は、ここまで堕ちてしまったんだと。

二人の実力は拮抗していた。

お互いにそれは認めていた。

最初は露骨に嫌がっていた大河だったが、徐々にクラスメイトとも仲良くなっていた。

風間ファミリーと一緒に旅行にだって行った。旅行先で迷子になったクリスと由紀恵を見つけ出し助けしてくれた。

妹の一子の師匠にもなってくれた。

とある白い少女だって助けていた。

みんなと焼き肉パーティもやった。

なのに。

どうして。

百代は、溢れ出る涙を拭う。

「もう、あの頃の、純粋なことで、ありきたりなことであっていたお前じゃないんだな。……大河……」

「……、」
「がつ!？」

急に、大河の体が後方に吹っ飛んでいった。

煙の中から弾丸のようなスピードで飛び出してきた百代に首を捕ま
れ、そのまま崩壊した建物に勢い良くぶつけられた。背中に痛みが
集中する。その事に気を取られていた大河は、目の前で拳を力一杯
握る百代に気付いていなかった。いきなり腹部を何度も殴打された。
「ガハツ!!！」

胃の中で吐き気が爆発する。それを我慢出来ずに、大河は口から大
量の血と胃液を吐き出す。そんな大河を気にせず、百代は攻撃を続
ける。

何度も何度も殴打を繰り返す。

もう街としての原型を失いかけている川神市には、住人がいない。

手加減する必要はない。

徹底的に、叩きのめす。

それしか方法が無いから。

「そろそろ目が覚めたか？大河」

「……、」

「……お前、まだ……」

笑っていた。

雨のような殴打を受けた大河は、まだ笑っていた。

元々そこまで打たれ強い訳ではない大河がまだ耐えているのが不思
議で仕方がなかった。

その時、

「……ああ？」

ズブリ、と。

“大河の腕が百代の胸部を貫いていた”。

百代は目を限界まで見開いて驚いた。

「悪いな。も才飽きたよ。オマエの説教はよオ」

――

川神市から離れた住民達は、姿が変わっていく川神市を見て、心を痛めていた。

そこには川神学園の生徒もいた。

「姉さん」

直江大和が、心配そうに呟いた。

それを見た風間翔一は、

「大丈夫だ。もも先輩は負けねえ。一子達だって向かってんだ。絶対に負けねえ」

大和に向かって言っているはずなのに、まるで自分にも言い聞かせているようにも聞こえた。

大和は、改めて風間ファミリーの面々を見る。

メンバーの中に、諦めている者はいない。

川神最強「いや、下手をすれば世界最強の百代が負けると誰も思っていない。いつものように、勝って戻ってくる。

大河の目を覚まして……。

いつものように……。

笑いながら……。

それは、大河にとって予想外の出来事だった。

(コイツ!！)

理解した時には既に遅かった。

クリスの圧倒的な力とスピードで放たれる突きに対応する事が出来ず、大河は直接それをモロに受け、痛みにも叫ぶ余裕すらなく、勢い良く後方に吹っ飛んでいった。

その直後に、何にぶつかったのかは分からないが、勢い良く炎が燃え上がった。

粉塵を覆うように、青白い光が走る。

どうやら、この力は末梢神経に直接電気を流すだけではなく、そのまま攻撃した相手にも流れるようだ。

(終わった……のか?)

そう思いたかった。

これ以上、『仲間同士』で傷付けなくなかった。

今ならまだ百代だって助かる。

大河の罪も少しは軽くなるはずだ。

だが、

そんな淡い幻想は、一瞬でぶち壊された。

赤く、自分の存在を主張するかののように、豪快に燃えている炎の中から、大河はゆっくりと出てきた。

(……何だ、この……違和感はッ!?)

「クリスウ。どうやら、怒りで『聖なる氣』を手に入れたみてエだなア?」

突きは直撃したはずだった。炎にも焼かれたはずだった。なのに。

“大河の体には、傷跡を一つ残っていないなかった”

「さっきまでの俺だったら、アレで確実に倒されてた」

こちらに少しずつ近づいてくる。

「だが、」

恐怖が込み上がってくる。

予想したくなかった。

“あれ”が目覚めていると理解したくなかった。ただ、世界は残酷にも、大河にそのその“力”を与えていた。

「残念だったなア？」

悪魔のような笑みを浮かべる大河。

「……『聖なる氣』か！！」

「あア。そオだ」

(何の力だ！？回復系か！？それとも別の何かー！)

「まさか、こんな力が俺に最も適したモノなんてなア」

「……、」

何を手に入れたのか全く分からなかった。

「知りたかったら来いよ。教えてやる」

――

榊原小雪は、ボロボロの川神市を疾走していた。

目指している場所は一つ。

大河のところ。

――あの時、大河は僕を助けてくれた。

思い出したのは、小雪が助け出されたあの日。

あの日以来、小雪は大河に恋心を抱いていた。

小雪自身、その感情には気づいてはいた。だが、その感情はいろいろなものだと思い、押し殺していた。

自分には必要のない感情。
だけど、

「……冬馬も準も、『自分の感情に素直になりなさい』って言った。
助けたい。

闇の深いところまで堕ちた大河を。

自分の手で……。

「……だったら僕は……。

閉じた瞼に映るのは、『焼き肉パーティした時に撮った集合写真』。

「……あの時の、お礼がしたい。」

――

クリスは、大河に向かって真っ直ぐに突っ込んだ。

折れたレイピアでもまだ充分に戦える。

ドンツッ！という轟音が響き渡った。

クリスの放った突きが、大河に直後したのである。

それを受けた大河は、先程と同じように後方に吹っ飛んでいく。

（避ける必要はない……？）

吹き荒れる暴風に少し目を閉じたクリス。

「よおく見とけよ」

大河の声が聞こえた。

ゆっくりとこちらに向かって歩いてくる大河の胸部には、確かに傷があった。

だが、

「……っ!？」

傷が、一秒も経たない速度で完治していく。知っている。

クリスは、この力を知っている。

川神百代の技の一つ。

『瞬間回復』。

「お前の力は『瞬間回復』か!？」

「いいやア。違う」

大河は否定する。

「俺の力は、『相手の力を奪う事』だ」

クリスの思考が。一瞬だけ停止した。

先程、大河は百代に何をしていた。

胸部を貫いていた。

その時に、大河は百代から『瞬間回復』を奪い取っていた。

百代の傷が回復しなかったのは、大河が、あの時既に奪っていたから。

「まア、打たれ弱エ俺にはイイモンが手に入ったなア」

勝てない。

そう、思った。

『聖なる氣』に目覚めていない大河だったら、まだ勝ち目があった。

もう、終わった。

クリスは、力なく地面に座り込んだ。

諦めるしかない。

そう、確信した。

その時だった。

『フフフフフフ！』

豪快な笑い声が上空から聞こえた。

大河とクリスは、上空を見る。そこには四機のヘリがあった。そこから、一人の女性が勢い良く飛んできた。その後には続き、複数の人間が跳ぶ。

ズドンッ！！という轟音が大河達の耳に振動を与える。

誰かが、灰色の粉塵を一閃した。

一瞬にして、そこに舞っていた粉塵は消し飛んだ。

そこに、複数の人間がいるのが分かった。

知っている。

全員知っている。

――鉄乙女。
くろがねとめ

――橘瀬麗武。
たちばなれいぶ

――九鬼揚羽。
あくまあげは

――橘平蔵。
たちばなへいぞう

――橘幾蔵。
たちばないくぞう

――川神鉄心。

――穴戸巴。
あなとど

――鉄自斎。
てつじさい

さらに、

「やっと追いついた！！」

聞き覚えがある声。

大河は声のした方を見る。

――川神一子。
かわかみ かすこ

――椎名京。
しいなみやこ

――まゆみきえ 黛由紀恵

――マルギッテ＝エーベルバッハ。

さらに、

「見つけた」

――榊原小雪。

総勢一三人。

そのうち五人は、大河の実力を遥かに凌ぐ者。役者は揃った。

もうこれ以上の血は流させない。

圧倒的な戦力が大河の行く手を阻む。

ここから、全て逆転する。

(後書き)

乙女さんのおじいちゃんの名前分らないから適当につけました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3232z/>

短編 | 真剣で私に恋しなさい！！

2011年12月11日04時55分発行